

## 植村和秀著 『日本のソフトパワー』

### 所 功

著者の植村和秀氏（昭和四十一年生まれ）は、京都大学法学部で政治学（思想史）を専攻し、学卒後直ちに助手となった俊秀である。その四年後に京都産業大学法学部へ着任した同氏は、私より二十五歳も若い、昨春まで二十年間、何でも尋ねれば的確に答えてくれる耳学問の先生であった。

この植村教授が、五冊目の単著（他に共著三冊・訳書二冊）として、昨秋（平成二十四年九月）本書を創元社から上梓された。受贈して主題と副題「本物の〈復興〉が世界を動かす」に心惹かれ、一昼夜かけて一気に読み通した。それほど魅力的な、しかも深く考え込ませる快著である。

本書（四六判二一六頁）は、全八章から成る（末尾に目次を付

記した）。各章末に挙げる参考文献などを活用しながら、全般に極めて高度な内容が、努めて平易に「です・ます」調で語り尽くされている。

主題に使われた「ソフトパワー」という用語は、二十年程前、ハーバード大学の国際政治学者ジョセフ・ナイ博士が提示した、「（ハードな）強制や報酬ではなく……（ソフトな）国の文化、政治的な理想、政策の魅力によって生れる」もの（同著・山岡洋一氏訳『ソフト・パワーへ21世紀国際政治を制する見えざる力』二〇〇四年、日本経済新聞社）に基づく。

しかし著者は、これを人間ならば「人柄の魅力と信用のようなもの」、また国家ならば「国柄の魅力や信用によって相手を動か

す……文化力の發揮」と捉え直す。しかも、身近な「日本のソフトパワー」に注目して、とりわけ「復興をソフトパワーの基軸」に据え「復興を日本の国柄にまで高めることができれば、日本は、国柄の魅力と信用によって、世界の人たちのこころを動かし、世界に本腰を入れて貢献できる」とまでいう。

それが決して牽強付会でも大言壮語でもないことは、本文で具体的に論証されている。とくに私が共感を覚えたのは、戦後あまり使われなくなった「国柄」という言葉に光を当て、それは「先人の美德と悪徳を理解しつつ、現在の人間（われわれ）がそれらを組み直し、未来に向かって……世界に向かって提案していくべきもの」と積極的に考えられていることである。

著者が「日本のソフトパワー」の基軸とみる「復興」の契機は、単に東日本大震災のような自然災害だけでなく、第二次世界大戦の敗北も日露戦争の勝利も「暮らしのあり方を根本的に変えざるをえなかった動機」である。それらに日本人は、どのような対処をしてきたか、多面的に検討している。さらに、今日の情報社会や大学生、主要世界が抱える現実的な問題を直視しながら、今の日本に可能なこと、為すべきことを提示している。

本書を通読して私なりに気付いたことは、わが皇室の存在こそ「日本のソフトパワー」の源とみてよいのではないか、それに著

者が全く言及されていないのは何故だろうか。

現行の憲法でも国家・国民統合の象徴と定められる天皇は、二千年来の皇位を世襲して、伝統的・近代的な文化を体現され、国家・国民のために全力で誠意を尽くしておられる。その「魅力と信用」は、国内のみならず世界の人々から「信頼と敬愛」をえて久しい。しかしながら、現在の日本では、それが世俗的な政治力や経済力などを遥かに越える至高のソフトパワーだとは、必ずしも十分に認識されていない。とはいえ、たとえば正月の宮中歌会始でも内外への行幸啓でも、それがもたらす文化的・社会的な影響力は測り知れない。

さらに、よく考えてみれば、「教育勅語」も日本のソフトパワーといえるのではないか。それは起草者の井上毅が夙に配慮したとおり、明治天皇の御意見（朕惟ふに……）を述べられ、御希望（……庶幾ふ）を示されたものである。その内容は「之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず」と自負しうる正当性、普遍性をもっている。それゆえ、明治四十年代（二〇世紀初頭）から、欧米でも高く評価されたのであろう（拙著『皇室に学ぶ徳育』平成二十四年、モラロジー研究所刊所収「教育勅語―誕生の経緯と特徴」参照）。

ただ、戦前の学校教育で多く形式に捉われ、少なからず強制も

行われたことは、反省を要する。しかし、現在でも、あのような具体的諸徳目を、まず親・教師・指導者たちが実践躬行すれば、おのずから「信頼と尊敬」がえられ、日本的な、「ソフトパワー」として再評価されるにちがいない。

(平成二十五年一月十五日)

〈追記〉参考までに本文の目次は、左のとおりである。

- 1 ふわふわしたソフトパワー  
ソフトパワーのつかみ所のなさ／本当は恐いソフトパワー  
／ソフトパワーと説明責任／アメリカの魅力と信用／オバ  
マ大統領の就任演説／ソフトパワーの資源と戦略／今の日  
本のソフトパワー
- 2 大震災のあとで  
大震災のあとで／首相がすべきだったこと／政府の責務／  
人は相身互い／復興という国柄／前向きに創造的に取り組  
む姿勢／ソフトパワーを今考える／日本だからこそソフト  
パワーを
- 3 日露戦争とソフトパワー  
日露戦争について／日露戦争とヨーロッパ／日露戦争と西  
アジア／船上の二人／二十年後／日露戦争の戦争指導／日  
露戦争の一人歩き／日露戦争のソフトパワー
- 4 昭和戦前期の挫折  
日露戦争の後で／昭和の戦争／敗北のパターン／中国問題  
と日本／内向きの中国政策／現場の苦勞／あまりにも現実  
的な／あまりにも内向きな／大東亜会議／昭和戦前期の挫  
折
- 5 昭和戦後期の不発  
敗戦の後で／敗北の経験者たち／企業と国家／大平総理の  
政策研究会／外に向くために／政策研究会報告書／大平へ  
の疑問／経済と文化／人間の顔をした資本主義／下村の見  
切りと不発／昭和戦後期の不発
- 6 今の日本の立っている場所  
再び今の日本へ／情報の文明学／情報とところ／日本を考  
えてもらう／情報の窓口が必要／留学生や旅行者にも考え  
てもらおう／悪い癖を繰り返さない
- 7 今の大学生に欠けているもの  
読む力／パソコンで書く力？／文脈を読む力／情報化が奪  
っていくもの／メールは瞬間芸／ネットは見るもの／情報  
化とコミュニケーション／若者の現在／年長者の未来
- 8 今の世界を動かしているもの

こころの時代／不安定な時代／第一次世界大戦の犠牲／ヨーロッパ内戦／日本の「第一次」世界大戦は第二次世界大戦／戦時宣伝の強化／敵対関係の強化／二十世紀の戦争とテロとの戦い

9 日本に今可能なこと

日本のミスマッチ／客観的すぎると企画にならない／ぼんやりと寄せていく／目指すべき社会像／腰を据えて取り組む／経験を共通化する／経験を外部に伝える／新しい危険にも目配りを／日本から世界に